

であらうか。從來未だ解釋を得ない、然も甚だ注意すべき事柄と考へる。ペリオ氏は嘗て此の *ng* 音の消滅、然もそれが一時的の現象で、今日ではまた明かに之が存在する事について一個の假定説を出して、「唐代に於て北方方言の鼻喉音（即ち *ng*）は事實消滅しやうとして居たが、遼・金其他漢族以外のものゝ侵入によつて生じた混亂の後、中央地方の漢人等によつて言語上恢復運動の如き事が行はれ、啻に此等の鼻喉音を消滅せしむる發展の勢を阻止したのみならず、却つて其の本來の完全なる音價を再現するに至つたものでは無からうか」と疑つた（J. A. 1912. *Kao-tchang, Qoço, Hou-tcheou et Qara-khodja* 参照）。併しながらペリオ氏自からも言うたやうに、發問は之で解き得た譯では無い。かゝる風に考へるにしても尙多くの證明を要するし、別に新しい解釋を加へ得るかも知れない。

自分の此の稿を草するのは前にも述べたやうに單に此の資料を斯學研究の士に提供して、其の研究を希ふの意味に外ならぬが、既に之に就て多少の類別を試みた中で、特に目立つた現象の幾つかを掲げて置くのも、或は讀者の或人々には何等かの便宜を供する事になるかも知れないから、茲に先づ其の表を載せて見る。特に之を研究する人の爲には蛇足に過ぎぬかも知れない。

## 音譯に關する注意

西藏字の音譯文字は主としてダス（Sarat Chandra Das）氏に據つたが、然も中には故らに自分の用ゐる馴れた所